

かまにし

第37号

発行 地域力推進蒲田西地区委員会
編集 地域情報紙編集委員会

大田区モノづくり優秀技能者表彰 「大田の工匠百人」

大田区では、昨年度の工匠二十四人に続き、平成二十一年度の「大田の工匠百人」の二十人を選定し、七月二日に表彰式が行われました。蒲田西地区からの表彰者、相馬政男さんを紹介します。

精密加工の達人

相馬 政男さん



相馬さんは昭和二十二年、大田区雑色で生まれ、現在六十二歳になります。昭和三十八年三井精機東京工場養成所に養成工として入社し、四年間機械加工技術を学び、

養成所退所後は大田区内や川崎の町工場にて日夜技術の習得に励みました。この間、加工技術だけでは心許ないと思うようになり、将来のことを考えて、設計事務所に入社しました。ここで機械設計、油圧設計の技術を貪欲に学び、昭和四十八年、二十六歳で設計事務所を設立し、機械、油圧、水処理等の設計を手掛け、この仕事を軌道に乗せ、生涯の仕事として事業の拡大に励みました。

設計事務所を始めて五年、仕事は順調でしたが、何か心の中に虚しさを感じ始めました。若い頃に夢中で加工技術と向き合い、努力していた純粋な自分を想い出すようになり、もう一度原点に戻り、自分が一番好きだった機械加工に戻りたいとの思いが強くなり、若干の回り道はしたが、設計の経験は今後も必ず役に立つ筈と考えました。旋盤、フライス、マシニング等奥の深い物作りの仕事にこれからの人生を賭けてみようと思いついたのは、昭和五十三年、三十一

歳の時でした。多摩川二丁目の現在の地に事務所を移動、開設したのは平成元年一月でした。得意の分野は小物部品の製作です。特に人工衛星の部品は材料、加工精度、正確さ、見た目の美しさ等、一つの小さな部品を仕上げのにも、細かく神経を使い加工していきます。また試作品の製作は、限られた日時で限られた個数で、一点一点がまさに手作りであり、最も神経を使う作業です。この技術が認められ、平成十年度の「大田区の優秀工場」に認定されました。

長男は現在、受注先でもある光学機器、治工具等の設計製作会社に勤務しています。今では、設計開発、加工とお互いにアイデアを出し合い、意見交換を通じて、切磋琢磨する間柄になりました。本人も将来は「大田のモノづくり」を目指し努力しています。

「今回は『大田の工匠百人』に選ばれ、この上なく光栄に感じます。大田の工匠の名に恥じないよう、よりよい製品作りに挑戦していきたい」と相馬さんは語ってくれました。

(取材 都築委員)

わがまちの顔

外国大使館で日本語講師 石橋和子さん

玄関の扉を開け、出迎えてくださった石橋さんの若々しさは、大正八年生まれの九十才を超えられた方とはとても考えられない驚きでした。

昭和十六年にこの地、西蒲田五丁目に嫁がれて以来七十年近くならぬ由。大手商社会社にお勤めのご主人が赴任地シンガポールで急逝され、帰国後その会社の上司に勧められ、この仕事に就かれたとのこと。アメリカ大使館の日本語講師テストに合格され、以後四〇年近く八十才の誕生日まで勤め上げられたという大変貴重な経験をお持ちになる方です。お部屋には、各国大使、公使またはその夫人の方々のスナップ写真が飾られています。

大使館勤務の傍ら書道を学び、休みの日には近所のお子様方に書道を指導し、また大使館の授業にも書道を取り入れてみました。課外授業として山梨県和紙の里を案内するなど、折に触れ日本文化の紹介を心がけ、そのような気配りがとても喜ばれ

ました。これらの功績に対しアメリカ国務省から異例の感謝状が贈られたとのこと、賞状がお部屋に飾ってありました。

日本語の授業は相手の方とマンツーマンの指導をされ、プライベートのお付き合いもあり、ご自宅に招いてホームパーティーも度々開き、接待をなさったとのこと。大使館では外交官ばかりでなく、その国を代表する方々がよく出入りをされて、思わぬ出会いもあり、楽しい思い出を沢山持つことができたそうです。

その後、アメリカ大使館ばかりではなく、フランス、オーストラリア、カナダ、ニュージーランドの要人にも日本語の指導を乞われ、それぞれの大使館まで通うようになりました。

授業を受ける生徒側からも逆に教えられる事も多々ありました。人は地位の如何にかかわらず常に「自由平等」であるということ。自身も「自由平等」の中に人間の基本的価値を見つけたようと、努力するようになった

蒲田西特別出張所管内

人口	男	29,956人
	女	27,325人
	計	57,281人
世帯	31,078世帯	

平成22年8月1日現在

編集後記

今回のわがまちの顔で取り上げた石橋さんは、九十才を超えられた現在でもとてもお元気で、日々を楽しんで過ごされるお姿は、見習いたいものです。

また、四面でご紹介した相馬さんの今に満足することなく、更に良いものを目指す姿勢こそ、大田のモノづくりを支える原点だと感じました。

情報紙に対するご意見やご感想、また投稿などを事務局までお寄せください。

事務局 蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七二二一七
(三七三二) 四七八五

そうです。

取材の間、「嬉しいじゃない」「楽しいじゃない」という言葉を何度も使っていました。小さなことでも、笑顔で素直に喜びを表現され、このおらかな気持ち、生かすのが今日まで歩まれてきた人生のコツなのかも知れないと感じました。

ご自身も二人の子お子様を育てられ、長女はアメリカに在住、長男は外交官として活躍されている素晴らしいご一家です。今でも欠かさない朝のジョギング、友人仲間との交流、人との出会いを大切にされ、「地域のお役に立ちたい」と意欲も十分で、充実した日々を過ごされているご様子が見て取れました。

(取材 伊藤、勝俣委員)



アメリカ大使、公使と共に

特集 『女塚貝塚』

女塚貝塚

古い時代の女塚地区を調査するため、大田区立郷土博物館の協力を得て調べた結果、女塚貝塚の存在が明らかになった。

女塚貝塚の発見された場所は、現在の太田区西蒲田四丁目二〇番付近の建築現場の地質調査の際に発見されたものです。

この場所については、本紙第三十号で特集した人間国宝「芹沢銈介」が住んでいた所です。同氏の子、芹沢長介は中学生の時（一九一二年）、この地を発掘調査し、女塚貝塚の存在を発表した。一九九九〜二〇〇〇年のこの土地に集合住宅が建設される際の事前発掘調査や、さらに隣接する土地の住宅建設に際しての発掘調査により、女塚貝塚の状況が判ってきた。調査報告書によると、「古墳時代の祭祀遺跡と考えられ、土師器や須恵器が出土」したことが記されている。この近くには十二天遺跡

やさらに下流には蒲田小学校付近遺跡、蒲田八幡神社遺跡などがあり、古墳時代以降の遺跡として呑川周辺の古代史研究には重要な場所になっている。

呑川の歴史

大田区の地図（地形図）を見ると、西側は標高およそ十メートルから四十メートルほどの武蔵野台地になっていて、東側は十メートル以下の沖積低地が広がっている。台地から低地にかけて、多摩川、呑川、内川が流れ、低地はそれらの河川が運んできた土砂が堆積して形成された。しかし、歴史的な推移を見ると、数百万年以前のこの地域全体は海底であり、現在の地形になるにはおよそ二千年前の弥生時代であった。

その時代、現在の埋立地を除く大田区地域が陸地となり、南部の低地は多摩川や呑川などが運んできた土砂の堆積した低湿

地帯となった。この時代は、米作りの技術が広がった弥生時代にあたり、農業生産のための低地の開発が少しずつ進んだ。二世紀ごろ呑川流域は、弥生時代後期を主体とした大きな集落が形成された。

女塚貝塚の場合、集落というよりは祭祀に関するような土器（土師器）や滑石製模造品が出土している。報告書によると、呑川の河畔の池沼にアシが群棲している環境で支配層による祭祀が行われたようだと述べている。（図参照）

近くには掘立柱の出土した十二天遺跡や蒲田八幡神社古墳もあり八世紀あたりまでの間に、稗田神社遺跡、さらに下流の下袋貝塚などが知られている。呑川流域は弥生時代から古墳時代にかけて開発が進み、低湿地帯の池や沼を水源とする水田が広がっていった。

また、この時代に呑川上流部の流域にも水田が開かれていった。水源は呑川とその流域両岸の台地から湧き出る湧水が主体であった。しかし広い水田を営む安定した水源は得にくく、呑川や内川などの小川川流域に小さな集落が出来たこととどまっ

水辺祭祀の復元想像図

発掘調査報告書「女塚貝塚」に次のように記されている。

この遺構が何のためのもので、なぜそこに該期の遺物が遺存していたのかとの疑問がのこる。遺物の出土分布からすれば、この時期のものは溝状遺構の南西端部に集中する様相を呈しており、台付壺や器台は溝状の遺構を横断する形で並ぶピットから三号土坑にかけての範囲にその多くが遺存。一方、祭祀の盛期と捉えられる古墳時代中期以降の碗類・高坏などは遺構全面に広く分布しており、これがなんらかの意味をもつものかとも思われるが、本調査の結果のみならずなんとも判断し難いものであった。

本調査の結果を得て、なお非常に限られた情報しかないながらも、本遺跡における祭祀の情景を、以下の条件のもとに図に描いてみた。

①立地は、呑川の河畔。周辺環境は淡水池沼が点在し、アシが群生するような開けた湿地である。

女塚貝塚の詳細

- 【弥生時代】
 - 祭祀関連遺構一基・・・
 - 土師器・須恵器・玉類
- 【弥生時代】
 - ピット五基・・・
 - 石製模造品・土製品
- 【奈良・平安時代】
 - 土坑三基・・・
 - 石器・金属製品・羽口
- 【近世】
 - 貝塚一基・・・
 - 貝類・魚骨
 - 粘土貼り遺構一基・・・
 - 近世陶磁器類

多摩川低湿地の遺跡小面積ながら古墳時代中期を主体とした豊富な資料が出土した。

参考資料

- 「呑川の歴史」
- 大田区教育委員会発行
- 「女塚貝塚」
- (株) グランイーグル
- 加藤建設埋蔵文化財調査部発行

(取材 柳通・石渡・勝俣委員)

※1 神祭の使用する杭

※2 神聖な杭

- ②祭祀関連遺構と判断した溝状の掘り込みは湧水を得て、検出されたピットは齊杵（いくい）（※1）・真杵（まきい）（※2）といった性格をもつものの跡と捉える。ただし、その上部構造は想像し難いものとして描かない。
- ③祭祀の主体者は、民間レベルではなく、権力者層である。
- ④祭具である土器を破砕した場所が不明なので、ここでは破砕された破片を水中に投棄する図とする。
- ⑤粘土貼りの遺構の性格が不明で、その粘土直上・直下に遺存していた玉類・滑石製模造品との関わりも想像し難いので、単にそれらの祭具を捧げている図とする。
- ⑥貝類などは祭事における神への供献か宴での供食品と思われるが、この場でどう扱われていたのか不明なので土器に納めた状態で図示する。
- ⑦季節は秋とする。

